

夕焼け 小焼け 陽が昇る

KOIZUMI TAKAO

小泉武夫

講談社
文庫



P. SAKAKI





講談社文庫

常州大字山書館
夕焼は小焼坊で陽が昇る
藏書章
小泉武夫

講談社

著者 | 小泉武夫 1943年、福島県の酒造家に生まれる。東京農業大学農学部醸造学科卒業。農学博士。専攻は醸造学・発酵学・食文化論。東京農業大学名誉教授のほか鹿児島大学、広島大学大学院医学研究科、別府大学、琉球大学、新潟薬科大学、石川県立大学の客員教授を務める。世界中の民族の食文化調査のかたわら、各地の農政アドバイザーや食育推進会議の委員なども多数務め、食糧自給率向上や地産地消推進のため活動中。近著『いのちと心のごはん学』（NHK出版）、『食で日本一の孫育て虎の巻』（マガジンハウス）、『発酵食品学』（講談社）、『賢者の非常食』（IDP出版）他、著書多数。

ゆう や こ や ひ のぼ
夕焼け小焼けで陽が昇る

こ い づ み た け お
小泉武夫

© Takeo Koizumi 2013

2013年3月15日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277485-7

夕焼け小焼けで陽が昇る 目次

時代の背景	9
捕らぬ雀の味算用	12
エジプト文化振興会	24
ブッシュマンの壁画	40
蒲ヶ池にキラリの涙	57
遊び人による遊び人のための遊び事	85
越冬隊の餌	109
猛虎ファイターズ奮戦す	134

野球博士と美空ひばりと山頭巾 197

受験心は薔薇色で 258

厨房「食魔亭」 289

汽車を待つ間 312

旅荘「桃園」の木村ヨシ様 330

夕焼け小焼けで陽が昇る 366

解説 鞍田炎（福島民報論説委員会幹事） 384



講談社文庫

夕焼け小焼けで陽が昇る

小泉武夫

講談社

夕焼け小焼けで陽が昇る 目次

時代の背景 9

捕らぬ雀の味算用 12

エジプト文化振興会 24

ブッシュマンの壁画 40

蒲ヶ池にキラリの涙 57

遊び人による遊び人のための遊び事 85

越冬隊の餌 109

猛虎ファイターズ奮戦す 134

野球博士と美空ひばりと山頭巾 197

受験心は薔薇色で 258

厨房「食魔亭」 289

汽車を待つ間 312

旅荘「桃園」の木村ヨシ様 330

夕焼け小焼けで陽が昇る 366

解説 鞍田炎（福島民報論説委員会幹事） 384

夕焼け小焼けで陽が昇る

時代の背景

夏の昼と夜は蟬時雨と蛙の大合唱が耳に滲み、秋は蝗の佃煮と本湿地の煮付けが食卓を飾り、冬は頭を貫かんばかりに尖った恐ろしいほどの氷柱が軒下から垂れ下がり、春は目に蓮華の花の可憐さと鼻に糞溜からの牧歌的な匂いが漂う、これはそんな山間の福島県阿武隈山地の小さな村が舞台の物語である。

村の名は馬背村。^{うまのせ}東西から谷が隆起して、馬の背のようになった海拔四二〇メートルの高地にひっそりと息づいている村である。村の中央には、北から南に向けて馬背川が流れ、そこには岩魚や山女が群れ泳いでいる。朝陽はゆつくりと東の山から昇り、夕陽は早目にまた向かい側の山に沈む。ああ、長閑なること宇宙の如き村なのである。

さて、この物語は今から六十年近く前の、昭和三十年代前半のものである。花の都東京では、戦後の混乱も治まって、驚異的な国力復興の兆が見え隠れし、開局間もない民放テレビが「日真名氏飛び出す」といった連続テレビドラマを放送し、天下のN

HKテレビが「事件記者」や「ハイウェイパトロール」といったシリーズものを電波に乗せ、熱湯をかけただけで食べられる「チキンラーメン」が爆発的に売れ、そこに刻みネギと魚肉ソーセージの薄切りをのせるともつと旨いというので誰もが夢中になり、力道山がルー・テーズを空手チョップでマットに沈め、美空ひばりや春日八郎が気分を出して歌いまくり、だつちやんが美人の腕にしがみつき、フラフープが太目の日本人の腰で回っていた、大体そんな時代背景と思えば結構である。

主に登場する人物は、私こと泉山醸児と大松玄白。名前からするとずいぶん古典的にみえるが、実はまだ毬栗頭の漬垂れ小僧である。当時、馬背村立馬背中学校一年生の私は造り酒屋のひょうきん息子、村立馬背小学校の六年生の玄白はその酒蔵の隣に店を開く魚屋の腕白坊主であった。私達二人は、小さい時からどこへ行くにも何をするのも一緒という、謂わば親の血を引く兄弟よりもかたいちぎりの義兄弟といった、深い絆で結ばれて育ってきた竹馬の友であった。

その当時の田舎の子供達からは想像すらできないほど大胆で巧妙な行動をとり、大人達の舌を幾度となく巻かせては村に格好の話題を提供していた不思議な仲間でもあった。ある時は、困っている人をさつそうと助けては村人から感心されたかと思えば、今度は周到な計画のもとに珍奇とも、また実に滑稽ともいえる悪戯をしては笑いを誘い、たちまち村人の心を奪ってしまう。そして次には、村の財政にわずかではあ

るが損失を与える失敗を起こしては、村人から顰蹙ひんしゆくを買うといった、全く掴みどころのない行動の数々に、むしろ関心を持たぬ大人たちの方が少なかったようだ。そして中学生になった頃には村人の誰もが数目置くほど陸梁りくりようとした振る舞いで闊歩かつぽするようになり、周囲は常に期待と不安とを交錯させていなければならなくなっていた。

胆きもを潰つぶし、驚嘆し、そしてまた別の時には感動のあまり心の中で拍手を送るといった、喝采かつさいしてよいのかそれとも嘆くべきなのか、皆目見当のつかない複雑な気持ちで、村人達は私達二人を見つめていたのである。「ひよつとするとあいつらは、村のために何か大きな事をもたらしてくれる気がするぞ」といった期待派と、「ふてぶてしい奴やつらだが、時々胸のすくような痛快なことをしてくれるから、そう憎めないな」といった中間派、そして、「もしかしたらとんでもない事をしでかして、村の名に泥を塗るかもしれない」といった不安派に分かれているようであった。

とにかく、私と玄白は村の自然に身をまかせ、風や水の流れのように自由奔放ほんぽう、天真爛漫しんらんまんに毎日を過ごしていた。そんな長閑のどけし村での、油断すきも隙もない二人の少年の抱腹絶倒の思い出も、今は遠い夢の日となったが、しかし、あの時代は何もかも実には大らかで、身も心も、人と人との関係も誠に豊かであった。そのすばらしかったセピア色の思い出話を、これから語ることにする。